

創造に向かう—自己と世界のありかたに注目して

水野友晴（日独文化研究所）

西田哲学において「創造」がどのような関心と視座から取り扱われているかについて探るため、講演「歴史的な身体」（1937（昭和12）年、信濃哲学会のための講演）と『善の研究』（1911（明治44）年）の二つを対象を選んで考察を進めることにしたい。

講演「歴史的な身体」の要点は次の箇所に求めることができる。「歴史的な世界は創造的なもので、人間は其の歴史的な世界の創造的な要素である。〔中略〕歴史的な世界の要素として創造的な主体となるところに我々の生命があり、本当の自己といふものもある」（14・287）。

この箇所に続いて西田は次のように語る。「創造的に進むことを離れると、主観的になるか、意識的になるか、抽象的になるか、物質的になるかする。それは人間の滅亡である」（同）。

これらの箇所を見るに、西田にあつては、人間が創造的な主体となることと、人間存在が意識面もしくは物質面へと還元され尽くされずにその独自性を保つこととはひとつつながりの事態として理解されていたように思われる。

興味深いのは、このように、意識面や物質面へと還元されつくさず、創造的な主体性が人間のもとから離れない状態を、西田が「日常の経験」（14・266）と呼び、『善の研究』の純粋経験の立場とそれとを関連付けながら語る点である。

『善の研究』で述べた純粋経験といふものはつまり我々の日常の経験から出発したものである。それは我々の日常の経験である、普通に経験科学といふやうなことを云ふが、経験科学となれば、それはすでに学問化されたものである。併し其の以前の直接的な、思想の細工を加へないものが基であつて、我々は其処から出発し其処へ帰らねばならぬ」（14・266）。

『善の研究』の基本的立場は、周知のように、「純粋経験を唯一の實在としてすべてを説明して見たい」（1・4）ということに求められる。それは、意識や物質から純粋経験に説明を加えてゆくというのではなく、逆に、純粋経験から出発してこれらのものについて知り、説明を加えるということであつた。ここで言う「知り、説明を加える」ことについては例えば次のように言われている。「経験とはありのままを知るといふ意ならば、単一とか所動的とかいふことはかえ

って純粹経験の状態とはいわれぬ、真に直接なる状態は構成的で能動的である」（1・26）。

このように見てくると、講演「歴史的な身体」で「創造的主体」と呼ばれることと、『善の研究』で「構成的で能動的」と呼ばれることとの間には密接な内面的関係があることが看取されてくる。本発表においてはこのような問題意識に基づき、「創造」に視野を置いた時に、講演「歴史的な身体」と『善の研究』とがどのように結ばれてくることになるのか、また、こうした考察を通じて、西田の「創造」の議論にはどのような特徴を認めることができるのかについて論じることにはしたい。